

# 全学対象日本語授業と UNiCert

## — 初級日本語能力とレベル 1 対応への試案

ゲーリッシュ大島圭子 Ôshima-Gerisch, Keiko

(アウグスブルク大学言語教育センター Universität Augsburg, Sprachenzentrum)

### 要旨/Zusammenfassung

1992 年以降全学対象外国語講座を中心に多くのドイツの大学で導入されている UNiCert は、外国語能力到達度を測る基準であるが、ドイツの高等教育機関を対象とする点で、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) とは目標を異にする。

大学教育に於いて専門分野を支える知力育成を目指し、複数の外国語習得を促進することにより視野の拡大を図る UNiCert の理念は、ドイツの大学に於ける日本語教育にとっても導入可能な意義ある制度と思われる。

さらにヨーロッパにおいては学習者数の少ない日本語のような外国語にとっては、他の主要外国語と同基準で評価されるため、講座の地位確保や、専門課程履修科目として認可される可能性を高め得るという利点もある。

本稿では従来のドイツの大学に於ける全学対象日本語講座のカリキュラムを UNiCert の基準に即して組むことを試みた。

Seit 1992 ist der UNiCert hauptsächlich bei den Fremdsprachen für Hörer aller Fachrichtungen an den deutschen Universitäten eingeführt. Er ist eine Norm für die Messung der allgemeinen fremdsprachlichen Fähigkeiten, unterscheidet sich jedoch durch seine Zielgruppe, die sich ausschließlich aus den Hochschulen in Deutschland zusammensetzt, von dem Gemeinsamen Europäischen Referenzrahmen für Fremdsprachen.

Der UNiCert hat zum Ziel, die das Fachstudium unterstützenden allgemeinen intellektuellen Fähigkeiten zu fördern und durch das Erlernen mehrerer Fremdsprachen den Horizont der Studierenden zu erweitern. Diese Idee vom UNiCert scheint mir für den Japanisch-Unterricht an deutschen Hochschulen anwendbar und daher ein einführungswertes System zu sein.

Außerdem ist nach meiner Meinung die Einführung von UNiCert für eine – angesichts der Zahl der Lernenden – „kleine Sprache“ wie Japanisch von Vorteil, da die hochschulpolitische Chance sich erhöht, den Stellenwert des Japanisch-Kurses innerhalb der Hochschule zu

sichern und die Japanisch-Ausbildung als Wahlpflichtfach für das Hauptstudium zu etablieren.

Im vorliegenden Bericht habe ich aus oben genannten Gründen versucht, das Curriculum eines konventionellen Japanisch-Kurses für Hörer aller Fachrichtungen nach den Anforderungen des UNICerts neu aufzustellen.

## 1 はじめに

2010年を以って欧州圏内の全大学がBA/MA制度を導入する最大の目標は、欧州に於ける高等教育の連携を容易にし、学術的交流を活発にすることと、高等教育享受者であるヨーロッパ市民の精神的視野の地平線を欧州全域はもとより、地球規模に拡大すること、即ち域内の教育基盤の安定と民主化を図ると同時に、グローバルな視野を与えることにあると言えよう。

これを受けて、欧州全体の外国語教育分野においてはヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)が開発されたが、ドイツにあっては更に、高等教育分野に特定した外国語能力到達度を測る測定基準(UNICert)を1990年に完成させ、1992年より実施している。

その眼目は、ドイツ各大学の言語教育機関が発行する証明書間の連携、複数言語間における外国語習得能力の関連付け、学習者の専門分野に関係なく要求される総合的言語能力の測定と証明にあると言えよう。

であれば、欧州圏日本語教育にあっても、日本、日本文化の媒体としての日本語教育と平行して、このヨーロッパの理念実現に貢献する外国語教育を目指す必要があるのではないか。さまざまな言語と多様な伝統文化との共存を基盤とする点で、ヨーロッパは世界の将来のあり方を先取りしているといっても過言ではない。そのヨーロッパの外国語教育の理念と対峙することは、コミュニケーション手段としての日本語の国際化の土台にも繋がるはずである。

### 1.1 UNICertの理念

数世紀にわたり培われてきたドイツの大学の言語教育に改革を試みるUNICert制度が目指すものは何であるか。先ずその改革の背景を挙げてみる。

### 1.1.1 ドイツ各大学の言語教育機関が発行する証明書間の連携を図る

従来ドイツの大学には自治が保証されており、その研究及び教育方針は各大学に任されている。従って言語教育においても、修了証明書は各大学の責任で発行されるため、統一性に欠け、学生にとって利便性は必ずしも高くなかった。この点に改善を加えることで、大学発行の言語能力証明書に一般性をもたせ、学生の便宜を図る。

### 1.1.2 複数言語間での習得言語能力の関連付けを可能にする

複数の外国語習得はヨーロッパ市民の相互理解を深め、視野の拡大を図る最も有効な手段の一つとして奨励される。そのためには複数の外国語能力を一定基準で測ることができれば、学習者の指針となり、学習の効率が上がるものと思われる。

### 1.1.3 学習者の専門分野に関係なく要求される総合言語能力を測定し証明する

従来は自然科学系学習者のための日本語、人文科学系学習者のための日本語というように、外国語習得にも学習者の専門分野を反映させることが一般的であったが、UNICertでは高等教育の現場で必要とされる総合的外国語能力の育成を目標におき、上級に入って初めて、専門分野の外国語が課せられる。

### 1.1.4 1970年代に始まる外国語能力測定のヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）作成の動きを踏まえて1990年に作成、1992年に制度導入を開始

外国語能力測定のCEFRが外国語のスキルを高める形式淘汰を測定するところから、高等教育では学習者の専門分野を支える知力育成を重視し、言語能力の共通基盤作りを目指す実質淘汰を前面に打ち出している。

従って第2項のレベル基準の対応を見れば明らかなように、UNICertのレベル基準は総合的言語能力の記述に徹しており、個々のスキルは学習者のニーズに委ねてある。

## 1.2 UNlcert の特徴

1.2.1 カリキュラム、試験、証明書発行は中央機関によらず、実施資格検定に合格した各大学に任せる

1.2.2 検定は3年ごとに申請更新

1.2.3 実施資格の検定基準

- 機関である
- 専任の言語教育専門家による授業
- 1クラス人数25人以下
- 各段階達成所要授業時間数基準は印欧語で週8-12時間（45分授業を1時間とする）で15週（120-180時間）
- 初級言語能力（聴解・発話・読解・作文）のレベル1から、母語話者に近い言語能力のレベル4までの4段階
- 下位二段階（レベル1とレベル2）は平常点の合計
- 上位二段階（レベル3とレベル4）は修了試験（筆記試験と口頭試験）を課する
- カリキュラムの内容は高等教育機関における言語環境に対応
- 上位二段階では専門分野の語彙を含む

## 2 UNlcert レベル基準と CEFR の対応

UNlcert レベル1はCEFRのB1に対応するので、ここに今一度両基準を併記する。

### 2.1 UNlcert レベル1

2.1.1 応用可能な語彙文法上の基礎知識がある

2.1.2 留学先及び勤務先で出会うと思われる日常生活上重要な場面に対応できる文字および口頭の基礎コミュニケーション能力を備える

2.1.3 その国の事情に関する基礎的な知識を有する

2.1.4 自己の能力、その長所および欠点を批判的に評価できる。目標外国語をさらに集中的に学習するためのストラテジーを習得している。

## 2.2. CEFR B1 (自立した言語使用者)

- 2.2.1 仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。
- 2.2.2 その言葉を話している地域を旅行しているとき起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。
- 2.2.3 その国一般にわたる基礎知識を有する。
- 2.2.4 自己の能力を批判的に評価でき、その長所、短所を自覚する力を備えている。外国語学習をさらに深める個人的学習ストラテジーを習得している。
- 2.2.5 身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。
- 2.2.6 経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。

## 3 アウクスブルク大学日本語講座における UNiCert クラスのモデル

では、レベル 1 を目標とする UNiCert のコースは具体的に何を対象にしたらよいのであろうか。ここに全学対象講座としてドイツの平均的講座と思われるアウクスブルク大学日本語講座のため UNiCert 1 コースのカリキュラムを組んでみた。

### 3.1 授業時間数の見積もり

週当たりの授業時間数は以下ようになる。但し、1 時間 = 45 分、WiSe は冬学期、SoSe は夏学期とする。

日本語 1 (WiSe)	4+1 (LL) 時間
日本語 2 (SoSe)	4+1 (LL) 時間
日本語 3 (WiSe)	4 時間
日本語 4 (SoSe)	4 時間
日本語 5 会話 (WiSe)	2 時間
日本語 6 会話 (SoSe)	2 時間
テレビニュースの日本語 (SoSe)	2 時間
合計	24 時間

冬夏学期共に講義期間は15週であるから、総時間数360時間となり、これは欧米語のレベル到達所要最大授業時間数の二倍にあたり（上記1.2.3参照）、条件を十分に満たしている。

## 3.2 カリキュラム

次に学期毎のカリキュラムを挙げ、レベル1到達過程を見ていきたい。内容測定の基準としたのは、CEFRのスキル項目と使用教材の文法シラバスである。

### 3.2.1 第1学期 使用教材『ドイツから今日は』1-12課

#### 3.2.1.1 目標

A1（基礎段階の言語使用者）

- 具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常表現と基本的な言い回しは理解し用いることもできる。
- 自他紹介、居住地、知人、持ち物などの個人情報について質問をし、答えることができる。
- 相手がゆっくり、はっきりと話してくれるなら簡単な応対ができる。

#### 3.2.1.2 スキル・シラバス

- 自他紹介（自分や相手の国籍、職業、年齢、住所、家族を紹介する。）
- 日常表現（物の名称と形容を述べる。自分の行為、嗜好、使用交通機関の説明ができる。時間、場所、時間的前後関係が述べられる。）

#### 3.2.1.3 文法シラバス

- 繫辞および動詞、形容詞を使用した叙述文の作成
- 付加語および述語としての形容詞とその変化
- 嗜好、能力、熟練の表現
- 存在文の作成
- 文体では、丁寧体現在形と過去形が使い、疑問文とその答えが分かる。
- 簡易体現在形による日記・メモが理解でき、自分でも作成できる。
- 文字はひらがな、かたかなの読み書きが可能。

3.2.1.4 読み・書きの総合タスクは第4学期に回す。

### 3.2.2 第2学期 使用教材『ドイツから今日は』13-24課

#### 3.2.2.1 目標

A2 (基礎段階の言語使用者)

- 家族情報、買い物、近所、仕事など直接関係がある領域に関する、よく使われる語彙、表現を理解する。
- 簡単で日常的な範囲なら、身近で日常のことがらについての情報交換に応ずることができる。
- 自分の背景や身の回りの状況や、直接必要のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。

#### 3.2.2.2 スキル・シラバス

- 日常起こりうる、勧誘、招待、提案、物の授受、行為の許可、禁止が表現できる。
- 文体では簡易体現在形による会話が可能。
- 文字は、ひらがな、かたかな、四級漢字75文字を習得。

#### 3.2.2.3 文法シラバス

- て形を使っての行為の接続、継続、依頼の表現
- 順接・逆接の複文、感情形容詞

#### 3.2.2.4 読み・書きの総合タスクは第4学期に回す。

### 3.2.3 第3学期 使用教材『福岡から今日は』1-10課

#### 3.2.3.1 目標

B1 (自立した言語使用者) 前半

- 仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。
- その言葉を話している地域を旅行しているとき起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。

#### 3.2.3.2 スキル・シラバス

- 経験や履歴を踏まえた自他の紹介ができる。
- 健康状態等の状態の描写、状態の変化の描写ができる。
- 簡易体過去形が使える。
- 日常表現で、コミュニケーションに重要な「のです」が使える。
- 行為および物品等の授受が説明できる。
- 文字はひらがな、かたかなが不自由なくこなせ、四級漢字を含む150字が読める。
- 掲示やポスター、カタログの中によく知っている名前、単語、単純な文を理解し、年賀状作成、宿帳の記入が可能。

### 3.2.3.3 文法シラバス

連体修飾文、ドイツ語の語法の助動詞に対応する表現、複文（時の複文、条件文）、アスペクト（自動詞と他動詞）

## 3.2.4 第4学期 使用教材『福岡から今日は』11-20課

### 3.2.4.1 目標

B1（自立した言語使用者）

- 明瞭で標準的話し方の会話なら要点を理解することができる。
- 簡単な方法で語句を繋いで、自分の経験や出来事、夢、希望、野心を語ることができる。
- 意見や計画に対する理由や説明を簡単にすることができる。
- 本や映画のあらすじを語り、それに対する感想、考えを表現できる。
- 総合的読み・書き能力を有する。

### 3.2.4.2 スキル・シラバス

- 予定、感想、自分の意見を述べることができる。
- 第三者の意見を仲介することができる。
- 知覚、可能の描写ができる。
- 文字は、ひらがな、かたかな、漢字 220 字を習得。
- 個人的に関心のある話題について、纏まりのある文を書くことができる。私信で経験、印象を述べたり、礼状が書ける。
- 広告、パンフレット、メニュー、予定表から単純な情報を推測できる。

### 3.2.4.3 文法シラバス

引用文、受動の表現、日常表現の敬語、条件文、使役表現、命令・警告の表現

日本語には漢字習得という欧米語にはない課題がある。筆者は意図して総合的読み書き能力の測定を第4学期に回した。最初の3学期間で蓄積されたひらがな、かたかな、漢字の知識の定着を図った上で、UNiCert レベル 1 達成後に総合運用能力として評価するのが妥当であり、現実を反映し得ると考えるからである。

### 3.2.5 第5学期 会話授業

UNiCertとCEFRは共に自主的な発話能力を従来の外国語教育以上に要求する。そこで、聴解・発話練習の為のタスクカタログを追加した。

#### 3.2.5.1 目標

自分の関心のある分野に関する、広範囲な話題について、明確かつ詳細に記述、プレゼンテーションができる。その際、文の構造は単純である。

#### 3.2.5.2 会話I 場面シラバスと文法シラバスの連携

- 形式的スキルを磨き、事柄を客観的に提示する訓練を行う。
- 教材は『福岡から今日は』CDブックを使用。
- 第3学期と第4学期で学んだ文法シラバスに沿った自由課題を解かせて文法知識の定着を図り、運用の具体的場面を提示して、応用力を高めることを意図する。
- 日本語を学習する学生の関心を惹きそうな話題を挙げることで、自主的発話への動機付けを強化する。

1 課「ボランティア活動」	上段話題・場面シラバス 下段文法シラバス
1 課「ボランティア活動」	あみだ籤を使ってボランティアの課題をきめる 「動詞簡易形現在+ことができる/ことになる」
2 課「地理クイズ」	国土面積、山の高さ、気温、人口等を比較 形容詞の比較級
3 課「この人はだれですか」	挿絵の中の人物を描写する 形容詞で形を使った叙述の連結
4 課「ホームステイの報告」	ホームステイでもらったことを語る 動作の授受（動詞で形+授受助動詞）
5 課「電話で招待する」	イベントに友達を招待する 「動詞ます形+に・くる/に・いく」
6 課「いろいろな学校」	日本の学校の規則 「なければならない、なくてもいい、てはいけない」
7 課「ポスター」	ポスターの絵を読む 条件文「～たら、～ましょう/～てください」
8 課「どんな順番でしょうか」	活動の順番を聞き取る 「動詞簡易形現在肯定形+前に」、「動詞た形+後で」
9 課「お化けアパート」	音をきいてその動作、行為を推測する 「動詞簡易形+みたい」、「動詞簡易形+ようだ」
10 課「日本の歴史」	日本史上の主な出来事を年表に記入する 動詞の簡易形を使った記述

### 3.2.6 会話Ⅱと日本語テレビニュースの理解

6学期目の会話授業では引き続き『福岡から今日は』CDブックを使用。

	上段話題・場面シラバス 下段文法シラバス
11 課「何になろうと 思っていますか」	将来どんな仕事をしたいか述べる 「動詞う・よう形＋思っている」
12 課「Eメールをはじ めてから」	状態や習慣の変化を述べる 「動詞簡易形＋ようになる」
13 課「十二支のなかに ねごがない理由」	十二支の起源を語る 受動の助動詞
14 課「池田先生にお願 いしました」	池田先生（敬語）と愛ちゃん（普通体）の行為 動作の授受（敬語と簡易体）
15 課「どう言います か」	敬語・丁寧体・普通体の使い分け 尊敬語・ます形・簡易形での依頼と質問
16 課「春になると」	三段論法の例 「と」を使った条件文
17 課「じしんが起きた 場合は」	火事や地震の場合のアドバイス 条件文、「動詞た形＋場合」
18 課「わたしにもさせ てください」	相手によって「させてくれる・させてください・さ せていただけますか」を使い分ける 使役形
19 課「有名人にイン タビュー」	「どうして科学者になりたいと思いましたか」 間接話法と直接話法
20 課「手紙をだしたの に」	「手紙を出したので、もうじき返事がきます。」 「手紙を出したのに、返事がきません。」 順接と逆説の助詞「ので」・「のに」

ニュース記事は自由発話能力涵養に有効である。その際記事の選択を日独で共有できる内容に揃えることが重要である。ここでは特に「高等教育における言語運用能力の基礎を作り、知力育成に貢献する」点に焦点が絞られ、UNICert レベル 2 で要求される「留学先および勤務先で出会うであろう場面において、言葉によりコミュニケーションを図ることができ、その際必要とされるその国に関する主な情報を有する」レベルへの移行の準備が行われる。

交換留学生を例にあげても、日本語コースの学生は留学書類作成の段階から日本社会と直面するわけで、形式的スキルだけでは到底日本社会を理解し、彼らの希望を満足させることはできない。日独で共通する社会的現象を理解することではじめて、日本に関する重要な情報を得ることができ、日本社会を深く理解するのである。UNICert 1 は日本留学の最低条

件であるが、レベル 2 に近づけておくことで留学の成果は倍増し、留学後にはレベル 3 の習得も確実なはずである。

#### 4 展望

筆者がアウクスブルク大学言語教育センターの依頼で UNICert 日本語コースの草案を作成したのは 2005 年であったが、2008 年になって同センターは UNICert 制度の導入を見合わせることを決定している。理由としては煩雑な申請手続きを実施し管理するのに十分な人手がないことと、既存のヨーロッパ言語共通参照枠で既に言語能力評価の一貫性と透明性を図るという目的はほぼ到達できているとの観点に至ったことを挙げている。

しかし、UNICert の意義を認めなかったのかということ決してそうではなく、将来 UNICert 導入に必要とされる教員数と管理人員が確保できる見通しがたった時点で、改めて検討するというものであった。言い換えれば、現状では必要な財源が確保できないので導入を見合わせるということになる。最大の経済的ネックは、25 人という、多くの大学の言語教育センターの現状からみると至って少人数のクラス編成で外国語教育を行うことを前提にするため、クラスの数を倍増することを余儀なくされる点にある。また日本語初級の場合、人数制限をしても果たして受講資格を得た学生が最後まで日本語を学習するかどうかは、本人にも教師にも全く予測が難しい問題である。これは経験者には説明するまでもないであろう。

ドイツにおける日本語講座の動向を見るかぎりでは、比較的最近開設された講座には UNICert を取り入れているところが多い。また旧東独のように 1990 年を境に大学制度が大きく変わった地域の大学ではほぼ全面的に実施されている。東西ドイツ統一を契機に導入された制度が UNICert であると言うこともできる。

たしかに CEFR は一般性があり便利である。しかし、大学の外国語教育の内容と一般の外国語教育の成果を同一の物差しで測る損失もそこにはある。CEFR の C2 が UNICert レベル 4 と同一ではあり得ず、両者は二種類の異なる高レベルの外国語運用能力を示す評価基準である。筆者のアウクスブルク大学言語センター勤務の経験で判断するかぎり、全学対象日本語講座の現実には UNICert の評価システムが適切であると考えられる。それは本稿で証明を試みたように、評価基準とカリキュラムの対応が明確に打ち出されるからである。

UNICert の目標と類似する既存の制度を捜せば、ドイツにあってはゲーティンスティテュートのディプロマが考えられるが、これは統一試験制度であるという点で別のカテゴリーに入る。イタリアのペルギアの大学機関で発行される CELI (Certificato di Conoscenza delle Lingua Italiana) がほぼ UNICert と同一の制度とみなされていることを考えると、制度としてはすでに実証済みであるとも言える。

大学機関で発行する証明書には大学教育現場における言語教育を支援する意義があることも忘れてはならない。バイエルン州における UNICert 制度の推進役を担っているエルランゲン大学では英語・ロマン語系言語に続いて、アラビア語と新ギリシャ語をこの制度に載せている。その報告を読むと、導入の際の留意点として以下を挙げている。

1. 学習者数の少ない言語（アラビア語、新ギリシャ語、日本語等）に於いては専門分野との連携が特に重要である。  
（例）法学部学生のための日本語、経済学部学生のための日本語等。
2. 言語証明書を専門課程履修の条件に入れる。（例）BA 課程の政治学、MA 課程の経済学等の選択必須科目。
3. UNICert 3 を視野に入れたうで、UNICert 2 コースを常設する。中央ヨーロッパの言語に比べて、これらの言語は授業方法に柔軟性があり、UNICert 2 コースの常設は教師にも学生にも大きな動機付けとなる。
4. 従って学習者数の少ない言語の大学内での地位確保に繋がる。
5. 以上を実現するためには財政を確保することが最優先課題である。
6. 学習者数の少ない言語はしばしば確実に社会の需要をカバーし、就職に繋がるので、大学にとっても財政を確保して養成するだけの意義がある。

上記項目は全学対象日本語講座一般にも該当し、学生の外国語履修動機付けを高める上で有効な政策であり、筆者は UNICert 導入を以ってその実現の可能性がさらに高まることを確信するものである。

#### 【参考文献】

吉島茂、大橋理枝（2004）：『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版。

- Eggenesperger, K.-H. und Fischer, J. (Hg.) (1998): *Handbuch UNlcert (Fremdsprachen in Lehre und Forschung)*. Bochum: AKS.
- Labascoule, Josiane (2005): *Rond-Point 1*. Stuttgart: Klett.
- Jany, Christèle et al. (2005): *Reprise*. Ismaning: Max Hueber.
- Caquineam-Gündüz, Marie Pierr et al. (2005): *Les exercices de Grammaire Corrigés Intégrés*. Paris: Hachette.
- UNlcert <http://rcswww.urz.tu-dresden.de/unicert>
- Oshima-Gerisch, K., Abe, E., Lubitz, M. und Kasai, Y. (2009): 『ドイツからこんにちは！』 Band 1. München: JapanPub.
- Oshima-Gerisch, K., Abe, E., Lubitz, M. und Kasai, Y. (2010): 『ドイツからこんにちは！』 Band 2. München: JapanPub.
- Oshima-Gerisch, K. und Oguro, Y. (2004): 『福岡からこんにちは！』 Band 1. München: JapanPub.
- Oshima-Gerisch, K. und Oguro, Y. (2007): 『福岡からこんにちは！』 CDブック Band 1. München: JapanPub.
- Oshima-Gerisch, K. und Oguro, Y. (2005): 『福岡からこんにちは！』 Band 2. München: JapanPub.
- Oshima-Gerisch, K. und Oguro, Y. (2007): 『福岡からこんにちは！』 CDブック Band 2. München: JapanPub.